

審査の結果の要旨

氏名 新井 竜 治

本論文は「戦後日本における主要木製家具メーカーの歴史的研究」と題されたもので、第二次世界大戦後の日本国内で誕生し、発展し、現在は衰退してしまった幾つかの有力な木製家具メーカーを対象とする。主たる目的は、木製家具メーカーの活動全体の動向を追跡し、その誕生・発展・衰退の全貌を明らかにすることである。また、各メーカーの活動において、家具の意匠、技術・機能、流通について分析を実施した。特に注目されるのは、家具メーカーが独自に刊行したカタログを網羅的に収集し、その体系的な分析を加えたことである。

本論文は、全4部で構成される。

序論では、論文の目的、研究の背景・意義、方法、対象、先行研究について述べる。

第1部は、概論「戦後日本の木製家具史序説」であり、戦後日本における主要木製家具メーカーの誕生・発展・衰退の全過程を明らかにした。その概要は以下の通り。

戦後日本で活発に活動する木製家具メーカーの多くは、大正期・昭和戦前期（1912～45年）に創業している。いずれも小企業であって、同時代には百貨店家具部・専属工場が家具のテイストを主導していた。戦後前期（1945～72年）では、初期に進駐軍家族用の住宅家具の特需があり、次第に大規模公共建築・官公庁及び一般企業オフィスビル等のコントラクトユース家具の需要が増加し、さらにアメリカのホームユース家具市場向けの輸出家具生産によって、木造家具メーカーの基礎が築かれた。戦後中期（1973～91年）には、円の変動相場制への移行・第一次石油危機・国内住宅市場の活況等により、対米輸出家具からの撤退、国内のホームユース家具市場への参入、バブル経済によるコントラクトユース家具の需要の増大を経て、大きく生産量を拡大した。しかし戦後後期（1992～2011年）になると、バブル崩壊を直接的な原因として、ホームユース・コントラクトユースともに家

具の需要が減退してゆき、さらに外国からの廉価家具輸入が急増し、また環境意識（3R）の浸透により木製家具メーカーは生産活動を縮小し衰退していった。

第2部「意匠論」（第1~6章）では、各社の家具のシリーズ・スタイル・デザイナーの特質・変遷・背景を述べる。第3部「技術論・機能論」（第7~10章）では、各社の家具の材料・工場・生産工程・機能の特質・変遷・背景を述べる。第4部「流通論」（第11~14章）では、各社の家具の物流・商流・情報流の特質・変遷・背景を述べる。その概要は以下の通り。

戦後日本における木製家具は、建築家や家具デザイナー（社内・外部）によって設計され、家内工業的から脱した比較的大規模な総合木製家具工場で一貫生産されるものになった。そのようにして生産された木製家具は、生産地周辺だけでの商圈で販売・消費されるものから、全国規模で流通するものになった。日本全国という規模で大量に消費される木製家具を設計・製造・流通させるようになった家具産業の成立が、戦後日本における重要な歴史的特質であった。

本論文の特徴は、戦後わが国に木製家具を広く提供した家具メーカーの活動の全貌を描いたことである。戦後の家具の歴史は、個々の突出したデザイナーの個人史や、デザイン論として描かれることが多いのであるが、本論文はその全体的な活動を把握しようとした初めての試みであり、先駆的な研究として位置づけられる。企業活動の全貌を、意匠・技術・機能・流通という点から克明に明らかにしようとする膨大な作業を基礎作業としており、その実証性に高い評価を与えることができよう。さらに、建築全体の建設史との関連が深まれば、戦後の住生活史の豊かな像が描かれることになるだろう。

よって、本論文は博士（工学）の博士学位請求論文として合格と認められる。